

# 店内保安員における万引き対策への意識と

## 万引きに対する態度の検討

—効果的な万引き対策の実践のために—

大久保 智生<sup>1</sup>・時岡 晴美<sup>1</sup>・岡田 涼<sup>1</sup>  
尾崎 祐士<sup>2</sup>・藤沢 隆行<sup>2</sup>・堀江 良英<sup>3</sup>  
松下 昌明<sup>3</sup>・高橋 護<sup>3</sup>

### 要約

本研究の目的は、効果的な万引き対策の実践のために、店内保安員を対象として、万引き対策への意識と万引きに対する態度について検討することであった。店内保安員20名を対象としてアンケート調査を行った。店内保安員歴は万引き対策への意識と万引きに対する態度とは無関係であり、捕捉人数の多さは対策のさらなる推進と個室に持ち込まれた際の声かけと関係していた。店舗と比較すると、店内保安員は、個室に持ち込まれた際には声かけを躊躇していることが示された。また、万引き対策をさらに推進させるべきと考える意識の高さが捕捉において重要な要因であり、万引き犯への恐怖は捕捉を思いとどまらせる要因となっていることが示された。

キーワード：万引き対策、店内保安員、店舗

### 問題と目的

近年、全国的に万引きの増加が大きな社会問題となってきている。店舗の万引きによる被害額は年間4千億円以上と試算され、現在、対策が進んでいる振り込め詐欺などと比べても莫大な額である。万引き被害は深刻な経営の悪化を導くことから、店舗は店内保安員を巡回させるなど様々な対策をとっている。

万引き犯罪の実態について、2000年以降では、警視庁が「万引きをしない・させない」社会環境づくりと規範意識の醸成に関する調査研究委員会(2009)を立ち上げ、東京都で調査を

行っている。また、皿谷・三阪・濱本・平(2011)が広島県で調査を行っている。このように、近年では、全国的に万引きの実態を明らかにした上で、万引き防止対策がとられるようになってきている。しかし、調査の多くは万引きをする側の調査であり、万引きされる側である店舗を対象とした調査は数が少ないのが現状である。万引きされる側である店舗を対象とした調査としては、例えば、「書店経営」編集部(1998)が書店における万引きの実態調査を行っている。また、全国万引犯罪防止機構(2010)は警察庁と協力して店舗を対象とした大規模な調査を

1 香川大学教育学部 (Faculty of Education, Kagawa University)

2 全国警備保障 (Zenkoku Security Guard)

3 香川県警察 (Kagawa Prefectural Police)

行っている。このように店舗を対象とした調査は、数は少ないながらも行われているが、実際に万引き犯と対峙することが多いのは店員ではなく、一般に万引きGメンと呼ばれる店内保安員である。にもかかわらず、これまで万引き防止対策に関する調査では店内保安員にあまり焦点が当てられてこなかった。店内保安員を対象とした研究としては、田中(2009)が万引き防止対策における制服警備員と私服警備員(店内保安員)の業務について考察を行っている。しかし、田中(2009)は万引き対策としての警備業の内容や特性について考察しているが、店内保安員の意識などを数値で示してはいない。したがって、効果的な万引き防止対策を探るためにも店内保安員を対象として量的調査を行う必要がある。

万引き犯罪は、香川県においても社会問題になっており、人口1000人当たりの万引きの認知件数が2009年まで7年連続全国ワースト1位であることから、万引き犯罪の防止が喫緊の課題となっている(大久保, 2012)。こうした中、2010年に香川県警察と香川大学の共同事業として子ども安全・安心万引き防止対策事業が立ち上がり、県内の万引きの実態を把握し、その要因を探るために被疑者(大久保・堀江・松浦・松永・江村, 印刷中; 大久保・堀江・松浦・松永・江村・永富・時岡, 2012)や一般の青少年や高齢者(宮前・堀江・松永・宮前・大久保, 2012; 大久保・宮前・宮前, 2012; 大久保・堀江・松浦・松永・宮前・宮前・岡田・七條, 2012)、店舗(大久保・堀江・松永・永富・時岡, 2012)を対象に調査を行ってきた。しかし、実際に万引き犯と対峙する一般に万引きGメンと呼ばれる店内保安員に関する調査は行っていない。効果的な万引き防止対策の実践のために、被疑者や一般の青少年や高齢者、店舗の意識だけでなく、店内保安員の意識についても明らかにする必要がある。

効果的な万引き防止対策を探るために、本研究では店内保安員が万引き防止対策に対してどのような意識をもっているのか、万引きに対してどのような態度でいるのかについて検討す

る。万引き対策への意識では、未然防止のための店内声かけを行うという対策のさらなる推進、実際に店内保安員が被害届の記入をすることから被害届提出の面倒さ、万引きを他人事と思わない万引きに対する責任感、間違っただけで捕まえることなどの誤認への恐怖、実際に万引き犯と対峙することによる万引き犯への恐怖、店員にもっと万引きについて知ってもらうための店員教育プログラムの必要性に焦点を当てる。万引きに対する態度では、万引きを発見した際に捕まえようとする万引き犯の捕まえることが多く判断が難しい個室に持ち込まれた際の声かけに焦点を当てる。そして、万引き対策への意識と万引きに対する態度が、店内保安員歴や月平均の捕捉人数によって異なるのかについて明らかにする。また、今後の万引き防止対策の実践のためにも、店内保安員がどのように万引きを考えているのか、特に店舗の側との比較を通して、店側と店内保安員で万引き防止対策への意識や万引きに対する態度が異なるのかを明らかにする必要がある。さらに、どのような要因が万引きに対する態度につながるのかについても明らかにする。

以上を踏まえ、効果的な万引き防止対策の実践のために、本研究では店内保安員を対象として、万引き対策への意識と万引きに対する態度について検討する。具体的には、まず、店内保安員歴や捕捉人数別に万引き対策への意識と万引きに対する態度について検討する。次に、店内保安員と店舗で万引き防止対策への意識と万引きに関する態度がどのように異なるのかについて検討する。最後に、店内保安員の万引き対策への意識が万引きに対する態度にどのように影響しているのかについて検討する。

## 方法

### 調査対象と手続き

店内保安員20名(男性4名、女性16名)に対してアンケート調査を行った。調査協力者の年齢は平均49.35歳、標準偏差は10.61であった。店内保安員歴は平均11.08年であり、標準偏差は5.12であった。調査協力者の月平均の万引き

捕捉件数は10.05人であった。

香川県内の事業所312店舗に対して郵送によるアンケート調査を行った。202店舗から有効回答が得られた。業種の内訳は、スーパーが105店舗、コンビニが23店舗、書店が43店舗、薬局22店舗、その他(ホームセンター、電気店、複合店舗など)が9店舗であった。回答者の性別は、男性178名、女性21名、不明3名であり、回答者の年齢は平均44.0歳、標準偏差は9.79であった。

なお、以上の調査対象者は、大久保・岡田・時岡・堀江・松下・高橋・尾崎・藤沢(2013)の研究と同一の対象者である。また、欠損値については平均値で補完した。

#### 調査内容

##### (1) 万引き対策への意識

万引き対策への意識について、対策のさらなる推進、被害届提出の面倒さ、万引きに対する責任感、誤認への恐怖、万引き犯への恐怖、店員教育プログラムの必要性の各項目について尋ねた。

①対策のさらなる推進：「ポケットやカバンなどに商品を入れた時点で声かけをすることで万引きを未然に防止したいと考えています。このことについて、どう思いますか」という教示のもと、「しないほうがよい」(1点)から「したほうがよい」(4点)の4件法で回答を求めた。

②被害届提出の面倒さ：「万引き犯を捕まえたとき、警察に被害届を提出することが面倒ですか」という教示のもと、「面倒ではない」(1点)から「面倒である」(4点)の4件法で回答を求めた。

③万引きに対する責任感：「万引きされたとき、責任を感じますか」という教示のもと、「感じない」(1点)から「感じる」(4点)の4件法で回答を求めた。

④誤認への恐怖：「万引きを誤認することが怖いですか」という教示のもと、「怖くない」(1点)から「怖い」(4点)の4件法で回答を求めた。

⑤万引き犯への恐怖：「万引き犯が怖いですか」という教示のもと、「怖くない」(1点)から「怖い」(4点)の4件法で回答を求めた。

⑥店員教育プログラムの必要性：「万引き防止を目的とした店員教育のためのプログラムが必要であると思いますか」という教示のもと、「必要でない」(1点)から「必要である」(4点)の4件法で回答を求めた。

##### (2) 万引きに対する態度

万引きに対する態度について、万引き犯の捕捉、個室に持ち込まれた際の声かけの各項目について尋ねた。

①万引き犯の捕捉：「万引きを発見したときに、どのように対応していますか」という教示のもと、「捕まえていない」(1点)から「捕まえている」(4点)の4件法で回答を求めた。

②個室に持ち込まれた際の声かけ：「個室(トイレや更衣室)に商品を持ち込まれたとき、どうしていますか」という教示のもと、「声をかけていない」(1点)から「声をかけている」(4点)の4件法で回答を求めた。

#### 結果と考察

##### 店内保安員歴別の万引き対策への意識と万引きに対する態度の比較

まず、店内保安員歴の中央値12を基準にして、店内保安員を保安員歴短期群、保安員歴長期群に分類した。次に、店内保安員歴によって万引き対策への意識と万引きに対する態度が異なるのかについて検討するため、保安員歴(保安員歴短期、保安員歴長期)を独立変数としたt検定を行った(Table 1)。その結果、万引き対策への意識では、対策のさらなる推進( $t = .218, df = 18, n.s.$ )、被害届提出の面倒さ( $t = .717, df = 18, n.s.$ )、万引きに対する責任感( $t = .001, df = 18, n.s.$ )、誤認への恐怖( $t = .849, df = 18, n.s.$ )、万引き犯への恐怖( $t = .277, df = 18, n.s.$ )、店員教育プログラムの必要性( $t = .001, df = 18, n.s.$ )において2群間に有意差は認められなかった。万引きに対する態度では、万引き犯の捕捉( $t = .447, df = 18, n.s.$ )、個室に持ち込まれた際の声かけ( $t = .210, df = 18, n.s.$ )において2群間に有意差は認められなかった。

以上の結果から、店内保安員歴によって万引

Table 1 店内保安員歴別の万引き対策への意識と万引きに対する態度の平均値と t 検定結果

	短期 N = 10	長期 N = 10	t 値
<b>万引き対策への意識</b>			
対策のさらなる推進	2.600 (.843)	2.500 (1.179)	.218
被害届提出の面倒さ	2.200 (1.317)	2.600 (1.174)	.717
万引きに対する責任感	3.100 (.876)	3.100 (1.197)	.001
誤認への恐怖	3.700 (.675)	3.900 (.316)	.849
万引き犯への恐怖	2.200 (.919)	2.300 (.675)	.277
店員教育プログラムの必要性	3.700 (.483)	3.700 (.483)	.001
<b>万引きに対する態度</b>			
万引き犯の捕捉	3.700 (.483)	3.600 (.516)	.447
個室に持ち込まれた際の声かけ	1.800 (1.135)	1.900 (.994)	.210

カッコ内は標準偏差

Table 2 月平均の捕捉人数別の万引き対策への意識と万引きに対する態度の平均値と t 検定結果

	捕捉人数多 N = 10	捕捉人数少 N = 10	t 値
<b>万引き対策への意識</b>			
対策のさらなる推進	3.200 (.919)	1.900 (.568)	3.806**
被害届提出の面倒さ	2.200 (1.317)	2.600 (1.174)	.717
万引きに対する責任感	3.400 (.966)	2.800 (1.033)	1.342
誤認への恐怖	3.700 (.675)	3.900 (.316)	.849
万引き犯への恐怖	2.200 (.789)	2.300 (.823)	.277
店員教育プログラムの必要性	3.600 (.516)	3.800 (.422)	.949
<b>万引きに対する態度</b>			
万引き犯の捕捉	3.800 (.422)	3.500 (.527)	1.406
個室に持ち込まれた際の声かけ	2.400 (1.075)	1.300 (.675)	2.741*

カッコ内は標準偏差

\* p < .05 \*\* p < .01

き対策への意識と万引きに対する態度に違いはみられなかった。店内保安員は熟練を要する仕事ではあるが、保安員歴が浅くても有能な店内保安員もいることから、単純な月日の積み重ねとは別の要因が万引き対策への意識や万引きに対する態度に影響していると考えられる。

#### 月平均の捕捉人数別の万引き対策への意識と万引きに対する態度の比較

まず、月平均の捕捉人数の中央値 6 を基準にして、店内保安員を捕捉人数が多い群と少ない群に分類した。次に、捕捉人数によって万引き対策への意識と万引きに対する態度が異なるのかについて検討するため、捕捉人数（捕捉人

数が多い、捕捉人数が少ない）を独立変数とした t 検定を行った (Table 2)。その結果、万引き対策への意識では、対策のさらなる推進 (t = 3.806, df = 18, p < .01) において有意差が認められ、捕捉人数が多い群が未然防止のための声かけなどの対策のさらなる推進を考えていることが明らかとなった。被害届提出の面倒さ (t = .717, df = 18, n.s.)、万引きに対する責任感 (t = 1.342, df = 18, n.s.)、誤認への恐怖 (t = .849, df = 18, n.s.)、万引き犯への恐怖 (t = .277, df = 18, n.s.)、店員教育プログラムの必要性 (t = .949, df = 18, n.s.) において 2 群間に有意差は認められなかった。万引きに対する態度では、

Table 3 店内保安員と店舗の各業種の万引き対策への意識と万引きに対する態度の平均値と分散分析結果

	店内保安員 N = 20	スーパー N = 105	コンビニ N = 23	書店 N = 43	薬局 N = 22	F 値
<b>万引き対策への意識</b>						
対策のさらなる推進	2.550 (.999)	2.922 (1.069)	3.696 (.559)	3.024 (1.084)	2.300 (1.302)	5.628***
被害届提出の面倒さ	2.400 (1.231)	2.076 (1.089)	2.304 (1.105)	1.721 (.984)	1.955 (1.090)	1.884
万引きに対する責任感	3.100 (1.021)	2.922 (.977)	3.143 (1.153)	3.791 (.412)	3.667 (.483)	9.049***
店員教育プログラムの必要性	3.700 (.470)	3.423 (.720)	3.609 (.499)	3.465 (.667)	3.650 (.489)	1.300
<b>万引きに対する態度</b>						
万引き犯の捕捉	3.650 (.489)	3.327 (.875)	3.286 (.845)	3.674 (.566)	2.952 (1.117)	3.557**
個室に持ち込まれた際の声かけ	1.850 (1.040)	2.571 (.995)	3.091 (1.019)	3.595 (.686)	2.944 (1.211)	12.841***

カッコ内は標準偏差

\*\* p < .01 \*\*\* p < .001

個室に持ち込まれた際の声かけ (t = 2.741, df = 18, p < .05) において有意差が認められ、捕捉人数が多い群が個室に持ち込まれた際の声かけを行っていることが明らかとなった。万引き犯の捕捉 (t = 1.406, df = 18, n.s.) において2群間に有意差は認められなかった。

以上の結果から、月平均の捕捉人数が多い店内保安員ほど対策のさらなる推進を願っていることが明らかとなった。つまり、有能な店内保安員は、未然防止のための声かけは店内保安員の仕事が減ることにつながる可能性があるにもかかわらず、対策のさらなる推進を願っていることが示された。また、月平均の捕捉人数が多い店内保安員ほど、個室に持ち込まれた際に声かけを行っていることが明らかとなった。したがって、個室に持ち込まれた場合に躊躇しないで声をかけることが捕捉の実績と関係しているといえる。

#### 店内保安員と店舗の万引き対策への意識と万引きに対する態度の比較

店舗に対しても、万引き対策への意識の対策のさらなる推進、被害届提出の面倒さ、万引きに対する責任感、店員教育プログラムの必要性と万引きに対する態度の万引き犯の捕

捉、個室に持ち込まれた際の声かけについては同じ項目で尋ねていることから、店内保安員の結果と比較することとした。店内保安員と店舗で万引き対策への意識と万引きに対する態度が異なるのかについて検討するため、店内保安員と店舗(スーパー、コンビニ、書店、薬局)を独立変数とした一要因の分散分析を行った(Table 3)。その結果、万引き対策への意識では、対策のさらなる推進 (F (4, 201) = 5.628, p < .001)、万引きに対する責任感 (F (4, 203) = 9.049, p < .001) において有意差が認められたので、Tukey法による多重比較を行った。対策のさらなる推進ではコンビニが店内保安員、スーパー、薬局よりも有意に得点が高く、書店が薬局よりも有意に得点が高い傾向があった。万引きに対する責任感では、書店が店内保安員、スーパー、コンビニよりも有意に得点が高く、薬局がスーパーよりも有意に得点が高かった。被害届提出の面倒さ (F (4, 208) = 1.884, n.s.)、店員教育プログラムの必要性 (F (4, 205) = 1.300, n.s.) において有意差は認められなかった。万引きに対する態度では、万引き犯の捕捉 (F (4, 204) = 3.557, p < .01)、個室に持ち込まれた際の声かけ (F (4, 190) = 12.841, p < .001) におい

て有意差が認められたので、Tukey法による多重比較を行った。万引き犯の捕捉では、書店が薬局よりも有意に得点が高く、店内保安員が薬局よりも有意に得点が高い傾向があった。個室に持ち込まれた際の声かけでは、スーパー、コンビニ、書店、薬局が店内保安員よりも有意に得点が高く、書店がスーパーよりも有意に得点が高かった。

以上の結果から、コンビニは対策のさらなる推進を願い、書店は責任感が強いことが明らかとなった。書店と店内保安員は万引き犯を捕捉しようとしているが、薬局は万引き犯を捕捉しようとしておらず、店内保安員はトイレ、更衣室などの個室に商品を持ち込まれた場合に声かけを躊躇していることが明らかとなった。店内保安員に注目すると、万引き対策への意識は店側とあまり変わらないことが示された。しかし、万引きに対する態度で店側とは異なっていた。店内保安員は、仕事であるから当然ではあるが、万引きが死活問題である書店と同じくらいに万引きを発見した際に捕まえようとしているといえる。その一方で、トイレや更衣室などの個室に持ち込まれた際には、声かけを躊躇しているといえる。これは、隠匿の現場などを見ていないことに起因するトラブルを避けるためであるといえる。

万引き対策への意識が万引きに対する態度に及ぼす影響

店内保安員の万引き対策への意識が万引きに対する態度に及ぼす影響について検討するため、万引き対策への意識を独立変数とした重回

帰分析を行った (Figure 1)。なお、店員教育プログラムの必要性については、万引き犯の捕捉や個室に持ち込まれた際の声かけとは直接関係しない要因であると考えられたので、分析からは除外した。その結果、万引き犯の捕捉に対して、対策のさらなる推進 ( $\beta = .628, p < .05$ ) が正の影響を及ぼし、万引き犯への恐怖 ( $\beta = -.542, p < .05$ ) が負の影響を及ぼしていた。

以上の結果から、未然防止のための声かけなどの対策のさらなる推進を望んでいる店内保安員ほど万引き犯を捕捉しており、万引き犯を怖いと思っている店内保安員ほど万引き犯を捕捉していないことが示唆された。したがって、万引き対策をさらに推進させると考える意識の高さが捕捉において重要な要因であることが示された。また、万引き犯への恐怖は捕捉を思いとどまらせる要因となっていることが示された。

まとめと今後の課題

本研究では効果的な万引き対策の実践のために、店内保安員を対象として、万引き対策への意識と万引きに対する態度について検討することを目的とした。まず、店内保安員歴や捕捉人数別に万引き対策への意識と万引きに対する態度について検討を行った。次に、店内保安員と店舗で万引き対策への意識と万引きに関する態度がどのように異なるのかについて検討を行った。そして、店内保安員の万引き対策への意識が万引きに対する態度にどのように影響しているのかについて検討を行った。店内保安員歴は万引き対策への意識と万引きに対する態度とは

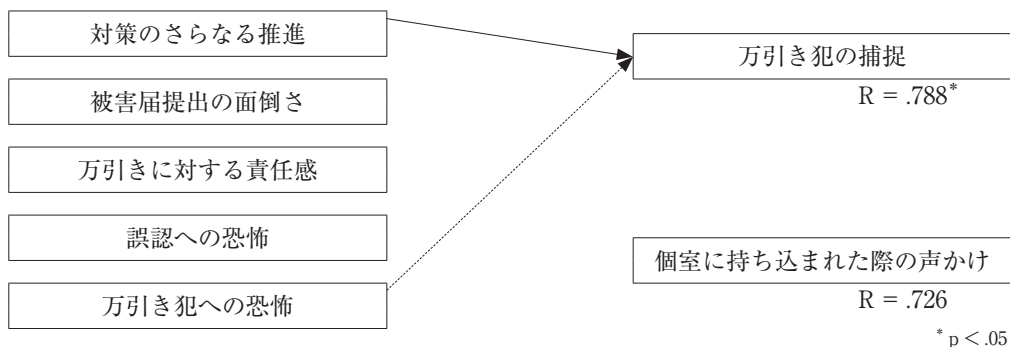


Figure 1 店内保安員の万引き対策への意識が万引きに対する態度に及ぼす影響

無関係であり、捕捉人数の多さは対策のさらなる推進と個室に持ち込まれた際の声かけと関係していた。店舗と比較すると、店内保安員は、万引きを発見した際に捕まえようとしているが、トイレや更衣室などの個室に商品を持ち込まれた際には、声かけを躊躇していることが示された。重回帰分析の結果から、万引き対策をさらに推進させるべきと考える意識の高さが捕捉において重要な要因であり、万引き犯への恐怖は捕捉を思いとどまらせる要因となっていることが示された。

店内保安員歴によって万引き対策への意識と万引きに対する態度に違いはみられなかったが、これは店内保安員という職業の特殊性によるものといえる。店内保安員の熟練には単純な月日の積み重ねの経験よりも、どれだけ多くの万引き犯と対峙し、さらに手口が巧妙な万引き犯と対峙してきたのかなどの経験の質が影響している可能性がある。したがって、どのように店内保安員を育成するのかという問題もあり、肉体的にも精神的にも激務であることから店内保安員の地位の向上や資格化なども今後求められるだろう。

月平均の捕捉人数の多さは、対策のさらなる推進と個室に持ち込まれた際の声かけと関係していた。したがって、有能な店内保安員ほど自分の仕事の範囲だけでなく、万引きの減少を願っているといえる。逆に捕捉数が多いからこそ、万引き犯とのいたちごっこに疲れ、対策のさらなる推進を願っている可能性もある。また、有能な店内保安員ほど、クレームをつけられる危険を顧みずに個室に持ち込まれた際に躊躇せず声かけを行っているといえる。このように優秀な店内保安員ほど、万引き防止の専門家としての意識が高いといえる。

店舗と比較すると、店内保安員は、万引きを発見した際に捕まえようとしているが、トイレや更衣室などの個室に商品を持ち込まれた際には声かけを躊躇していることが示された。店内保安員という仕事上、万引きを発見した際に捕まえようとするのは当然であるが、店舗とは見るポイントが異なるため、万引きを発見してい

る割合が高いといえる。そのため、万引き犯の捕捉において、厳密な意味での比較は難しいのかもしれない。また、店員のほうがトイレや更衣室などの個室に商品を持ち込まれた際に声かけをしているということは、店員が個室に持ち込まれた際の声かけがその後のトラブルの原因になりやすいことを知らない可能性もある。こうした店内保安員と店舗の意識のずれは今後解消していく必要があるだろう。

万引きに対する態度に及ぼす影響については、万引き対策をさらに推進させるべきと考える意識の高さが捕捉において重要な要因であり、万引き犯への恐怖は捕捉を思いとどまらせる要因となっていることが示された。新たな対策を推進しようという意識の高さは万引き犯の捕捉につながることから、現実的な対策を考えると店内保安員だけでなく店舗全体での意識の向上が求められるだろう。万引き犯への恐怖は、店舗においても万引き犯の捕捉を妨げる要因になることが推測されるため、複数人での対応など万引き犯への恐怖を緩和することが必要であろう。犯罪を見咎められ、暴れるかもしれないという万引き犯への恐怖の感情が起こるのは当然といえるため、こうした状況をそもそも作らないという選択肢も必要であろう。その際、香川県万引き防止対策協議会で推進しようとしている隠匿した際に未然防止のための声かけ(大久保・岡田・時岡・堀江・松下・高橋・尾崎・藤沢, 2013)をすることは、犯罪になる前に抑止しようという試みであり、暴れたり、逃走する可能性はこれまでよりも低くなると考えられる。したがって、これまでのように店外に出た瞬間に捕捉するという取り組みだけではなく、別の取り組みの可能性も考えていく必要があるだろう。

今後の課題としては、2つ挙げられる。1点目は対象の問題である。本研究に参加した店内保安員は20名と少なく、本研究の結果は一般化できるものではないといえる。ただし、これまで店内保安員の万引きへの意識を扱った調査はないことから、数は少ないながらも店内保安員の意識を明らかにしたことは意義があるといえ

る。万引き対策としての警備業は、外国においても歴史があり、定着している (Abelson, 1990) ことから、今後はさらに店内保安員に限らず、制服警備員も含め、警備業を対象として大規模な調査を行う必要があるだろう。

2点目は、今後の展開である。熟練した店内保安員は、客を少し観察ただけで客の動きがある程度予測できることから、こうした熟練した店内保安員の実践知について質的研究などを行い、詳細に明らかにしていく必要があるだろう。今後は店内保安員の実践知を明らかにし、それらを店舗での万引き防止対策に役立たせることが求められるだろう。そして、多くの店舗で活用できる形にプログラム化し、実践し、評価していくことでさらに有効な対策が可能になるだろう。

## 引用文献

Abelson, E. 1990 *When ladies go a-thieving*. Oxford University Press. 椎名美智・吉田俊実 (訳) 1992 淑女が盗みにはしるとき：ヴィクトリア朝期アメリカのデパートと中流階層の万引き犯 国文社

「万引きをしない・させない」社会環境づくりと規範意識の醸成に関する調査研究委員会 2009 万引きに関する調査研究報告

宮前淳子・堀江良英・松永祐二・宮前義和・大久保智生 2012 一般高齢者における万引きに関する心理的要因の検討：家族および友人関係、攻撃性、認知症傾向が万引きへの意識に及ぼす影響 地域環境保健福祉研究, 15, 1-8.

大久保智生 2012 青少年の万引きに対する規範意識：香川県子ども安全・安心万引き防止事業の取り組みから 青少年問題, 646, 44-47.

大久保智生・堀江良英・松永祐二・永富太一・時岡晴美 2012 万引きの多い店舗はどのような特徴があるのか：万引き防止対策に関する店舗調査から 香川大学教育学部研究報告, 138, 11-21.

大久保智生・堀江良英・松浦隆夫・松永祐二・江村早紀 印刷中 万引きに関する心理的要因の検討：万引き被疑者を対象とした意識調査から 科学警察研究所報告

大久保智生・堀江良英・松浦隆夫・松永祐二・江村早紀・

永富太一・時岡晴美 2012 万引き被疑者における万引きに関する心理的要因間の関連の検討：家族および友人関係と攻撃性が万引きの心理に及ぼす影響 子育て研究, 2, 13-20.

大久保智生・堀江良英・松浦隆夫・松永祐二・宮前淳子・宮前義和・岡田涼・七條正典 2012 一般の青少年と高齢者における万引きに関する心理的要因の検討：世代によって万引きへの意識はどのように異なるのか 香川大学教育学部研究報告, 138, 1-10.

大久保智生・宮前淳子・宮前義和 2012 青少年の万引きに関する心理的要因の学校段階別の検討：家族および友人関係と攻撃性が万引きへの意識に及ぼす影響 生徒指導研究, 11, 57-67.

大久保智生・岡田涼・時岡晴美・堀江良英・松下昌明・高橋護・尾崎祐士・藤沢隆行 2013 万引き防止対策におけるエビデンスに基づく社会的実践サイクル：店舗および店内保安員の調査結果に基づく未然防止のための店内声かけマニュアルの作成とその実施 香川大学教育学部研究報告, 139, 35-51.

皿谷陽子・三阪梨紗・濱本有希・平伸二 2011 万引き被疑者の特徴に関する質問紙調査 福山大学こころの健康相談室紀要, 5, 45-52.

「書店経営」編集部編 1998 書店のための万引防止読本 メディアバル

田中智仁 2009 万引対策における保安警備業務の一考察：制服警備員と私服警備員の差異を中心として 東洋大学大学院紀要, 46, 15-34.

全国万引犯罪防止機構 2010 第5回全国小売業万引被害実態調査報告書